

# 日英対照・認識的モダリティの研究動向

黒滝 真理子

## 要 旨

近年日本語教育研究においては、モダリティ現象の多様性の背後に多岐にわたるモダリティ概念が取り入れられている。例えば、「英語の法助動詞」＝「日本語の文末表現」という安易な等式化によって、モダリティとは「命題という客観的な事態の表現に対する、発話時点における話し手の（主観的な）心的態度」を表すとする比較的受け入れやすい分析が、様々な視点、様々な方法論によって試みられている。本稿では、まず、これらの日本語研究における2つの立場、即ち「主観表現論」や「階層的モダリティ論」と「非現実事態陳述モダリティ論」を概観する。次に、英語において、法助動詞一形式で複数の意味を表すとする対応現象を、共時的な「多義性」として安易に位置付けることへの疑問を提示しつつ、英語学におけるモダリティの先行研究と第2言語としてのモダリティの習得研究を概観する。その上で、中間言語としてのモダリティのありかの追究やモダリティ習得の新たな方向性を探りながら、さらには日本語教育への応用の可能性を示唆する。

【キーワード】主観表現論、階層的モダリティ論、非現実事態陳述モダリティ論、多義性、文法化

## 1. はじめに

英語のmodalityが日本語の「モダリティ」として、研究史上同等の地位を獲得したのはいつのことであったであろうか。筆者の知る限りにおいては「モダリティと命題」（中右 1979）に端を発し、それ以後1980年頃から様々なモダリティ論が展開されている。20年の歴史が経過した今日、日本語学の世界でも「モダリティ」のことは広く定着し、それだけにある種都合のよいカバータームとして利用されている感がある。伝統的国語学の陳述論者達、例えば金田一（主観的／客観的表現）、芳賀（伝達の陳述／述定の陳述）、時枝（辞／詞）、シヤルル・バイのmodus／dictumの訳語（言表態度／言表事態）、渡辺（陳述／叙述）、寺村（ムード／コト）等は、目的意識の相違からモダリティ概念の捉え方に統一性はみられない。則ち、それが意味範疇なのか、言語形式の名称なのか明瞭ではない。また、僭越な物言いとなることを承知の上で敢えて発言させていただくとするならば、筆者自身、英語学の世界で言語直観に頼り過ぎるmodality概念の捉え方やmodalityという大きな枠の中に占める法助動詞の位置付け<sup>1</sup>という考え方には、これまでもこれからも、やはりどうしても肯定的地点に自己を位置づけるという立場を構築することには、少なからざる躊躇とささやかな反論的姿勢を持たざるをえない。

モダリティとは一体何ものなのであろうか。一

般的に「話者の心的態度」といわれているが、具体的には、発話の中のどこまでが心的で、どこからは心的でなくなるのだろうか。その定義は研究者により微妙に異なる。モダリティの構造的定義として「文の意味は<モダリティ>と<命題>から成る」があげられ、広義には否定や時制もモダリティに含まれている。一方、概念的定義は「発話時点における話し手の心的態度を表す。但し、発話時点とは<瞬間的現在時>である。」で、話者の発話時の主観が文法形式によって表されたものとしている。そこには必ず「発話時」との制約がついていて、時制はモダリティという枠の外に位置付けられている。「主観」や「心的」という表現も曖昧である。話者のフィルターを通した視点は全て主観的なのか、それとも話者の視点にも客観的なものと主観的なものがあるのか。本稿では、従来のモダリティ論を比較することで、新たなモダリティの捉え方をまとめてみたい。

## 2. 日本語学におけるモダリティ

### 2.1 日本語モダリティの研究史

まず、日本語のモダリティ研究史を概説しておこう。かつての陳述論争（山田の陳述論や時枝の詞辞論など）を展開していた時代の日本語研究は、以下のようにある意味で言語研究としては独自の道を歩んでいたといえよう。例えば、モダリティ論の考察対象に絞って言及してみると、次のようになる。

山田(1936)は文末形式、時枝(1950)は文末形式と非文末形式(副詞等)をとりあげた。渡邊は1953年に文末形式、1954年では文末形式と文機能(＝文類型)即ち、話者の内容把握と聞き手への伝達との2側面を捉える。金田一(1958)は「う」「だろう」の主体的把握のものを不変化助動詞(辞の中に主観的／客観的意味両方ある)とする。更に、渡邊(1971)では、「[叙述機能]と[陳述機能]の統合で[文]は成立する」となる。

これが「ポスト陳述論」の流れとでもいうべき現在の日本語研究となると、欧米諸国の影響が非常に強く、用語・概念や方法論までもを取り入れる傾向にある。まず、日本語研究に mood「ムード」という用語を持ち込んだのは恐らく三上(1959)であろう。日本語にはないにもかかわらず、西欧語の動詞の屈折範疇を十分意識して、文末形式のみが扱われた。それを引き継ぐ形で寺村(1981)が「ムード」として一般化させた。考察対象は文末形式(助動詞や終助詞)に取り立て助詞を含めている。寺村は、対事的ムードと対人的ムードの区別を導入したものの、形式範疇から離れることができなかった。

日本語研究で初めて、modality の用語を導入したのは Ueno (1971) であった。あくまでも英文法の mood (叙法) と modality (法性) の区別を念頭におき、法助動詞や法副詞(文末形式と非文末形式)まで広く範疇化している。これが後の益岡(1991)の手法である。鈴木(1972)や奥田(1985)らは一貫して「モダリティ」を用いる。鈴木において、モダリティの定義は「文の素材的な内容をめぐっての、話し手の現実ならびに相手に対する態度の言語的な表現」とあり、文末形式に反映されるものに限って言及する。奥田は事実の確かさや時制の制限の有無等、種々な意味的視点からの分類を導入し、文機能論としての要素が強くなっている。中右(1979)はモダリティの定義として二点(①話し手の心的態度、②発話時点すなわち「話し手の瞬間的現在時」)をあげる。文末形式と非文末形式を対象とする。モダリティは、テンス・アスペクト、真偽、否定、疑問、省略、代用などの作用域になく、またその対象とならないと位置付ける。また中右(1994)では、言語普遍的な階層意味論モデルにおいて、文の意味構造を「命題内容」と「モダリティ」の二極構造とする考えが示される。意味論的に定義してはいるが、定義されたモダリティ自体は形式範疇であって、語

用論的な発話内効力や対人機能的意味をモダリティ範疇としていない。

仁田(1991)の文法体系は寺村を継承しているが、モダリティに関しては顕著な相違が見られる。「ムード」を用語上「モダリティ」に変更したのである。文機能論志向といえる。モダリティにく「発話時」という条件をとり入れ、その考察対象として、文末形式＋主観性を持った実質語(感情形容詞)＋文機能を扱った。「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」という区別を立て、文構造のプロトタイプとして[[[言表事態]言表事態めあて]聞き手めあて]を提示し階層性を論じた。その内、言表事態めあてと聞き手めあてを[言表態度]とし、モダリティと丁寧さを含む。しかしながら、擬似と真正のモダリティ形式の区別をしつつ「伝達のモダリティ」までふれておきながら、発話機能論までは発展させていない。則ち、発話機能論の枠組みで論じた先行研究(Austin 1962; Searle 1979; Leech 1983; Levinson 1983)は日本語研究においては皆無に等しいということになる。

益岡(1991: 87)は[文＝命題(表現主体から独立した客観的な事態を表す部分)＋モダリティ(表現主体の表現時における心的態度を表す部分)]とし、モダリティを「表現(態度)系モダリティ」と「判断系モダリティ(真偽判断と価値判断のモダリティ)」とに大別した。ところが、益岡の[部分]にあたる範囲は次第に変容していく。益岡(1991)ではアスペクト表現部分までを命題とした。益岡(1997)ではこれを改めテンスまでとする。そして、最近の益岡の論(2000: 97)では「命題とモダリティの境界は認めつつも、その境界は両者を絶対的な形で分割するものではないという柔軟な見方を採りたい」と考えるまでに至っている。いずれにしても、仁田、益岡両者とも、モダリティの担い手が話者の表現態度など感情的なものから、客観的な判断という知的認識レベルにまでまたがり広く捉えている。

これらから察すると、用語の適用が不適切であることに起因し、モダリティの性質の相違を日本語の特殊性に帰してしまっている場合が多々あることがうかがえよう。則ち、モダリティ論で問われるのは文末表現で、日本語では述語にあたり、そこに話し手の心的態度が集中的に現れると考えられてきた。ここで問題となるのは、文末のどこまでが命題であり、どこからがモダリティに相当するかである。現

に、前述した益岡の解釈の変化からも、命題とモダリティを形態素的に分別することの限界を予想せしめる。仁田(1991)ではモダリティは表現形式であるとされ、益岡はモダリティを意味と見ているのか形式と見ているのかが明確ではない。ところが、仁田(1999)ではモダリティが意味の次元の存在であることが強調される。当然、モダリティは意味であるべきであろう。それらが、いまだ日本語モダリティ研究において不鮮明さを残している一因といえよう。則ち、どの捉え方も、それが意味範疇なのか、言語形式の類別なのかが明確ではなく、諸研究者の言語観に依拠し過ぎるため統一性がみられないのである。

更なる問題は、「命題内容に対する」心的態度というより、むしろ発話の「聞き手に対する対人機能的意味」をモダリティの考察対象に含めた先行研究が多くみられる点である。法助動詞の行為拘束性(deontic)の意味概念からモダリティを対人機能的意味にまで拡大させたのであろうが、この問題は特定の言語形式のみで伝達されるとは限らず、多くは語用的条件が関与する。日本語のモダリティ論は、仁田の「伝達のモダリティ」を契機に、発話機能論を論じる必要性のある地点にまで既に到達しているが、その入り口にとどまっているといえる。つまり、モダリティ論という枠組みの中だけでは限界があるように思われるので、この発話機能に関しては更なる整理が求められよう。現在の日本語研究にはモダリティをめぐる二つの動向がある。その二つのモダリティ観(主観表現論としてのモダリティ観と叙法論としてのモダリティ観)について以下ふれることにしよう。

## 2.2 日本語モダリティ論の二つの立場

### 2.2.1 主観表現論的(階層的)モダリティ論

2.1 で概観した仁田、益岡や Palmer に代表されるモダリティ観を「階層的モダリティ論」といい、中右の「主観表現論」とともに共通性が認められる。

①モダリティとは、話し手の発話時における事態の把握の仕方や話し手の主観的な表現態度が文法形式によって表現されたもの。

②モダリティは、命題内容を(統語的にも意味的にも)重層的に包む。

この立場は以下の5点を主張するが、尾上(2001)も指摘するように、そこにはいくつかの問題点がある。(1)文の文法構造の中に予め2つの部分(客観的意味に対応する部分と主観的意味に対応する部分)が

分割されて存在すると考え、短絡的に各々の語形態を主観/客観という対立で役割分担している。

これに対しては以下の疑問が提示される。何をもちて命題要素と認定するのか。「客観的な事態」を表す形式として、名詞「コト」の内部要素になり得るか否かを調べればよいということになるが、その判定は直感に基づいた主観的なものになりかねない。また、発話の中で常に命題とモダリティが2層に分離されるのか。言語表現の文法化を通時的にみても、命題の意味を表す言語表現からモダリティの意味が発展したと考えるものが多く、共時的にみても両者間には認知構造上密接な関係があると思われる。事実、益岡(1991)では、アスペクトまでが命題に属すると考えられていたが、その後、益岡(1997)において、アスペクトに加えテンスまでを命題とした。益岡(1999)では、更に「認め方」も含める立場をとることになる。ここに至ると、仁田や中右<sup>2</sup>と同じ見解ということになろう。命題とモダリティの境界を具体的にどこに求めるべきなのか。総じて、90年前後のモダリティ研究では、命題以外の働きをひとまとめに(終助詞、命令、疑問、否定までを広く)モダリティとしている。しかし、英語の法助動詞が関係節中におさまることを考慮に入れた上でこの立場をとると、法助動詞はモダリティ部分ではなく、命題部分として分類されてしまうおそれがある。

(2)主観的意味要素が客観的意味に対応する部分を重層的に包みこみ、文末に位置するほど主観性が強くなるといわれる。

しかしながら、これに対しても以下のような疑問が生じる。つまり益岡<sup>3</sup>も指摘するように、語順というのは文法構造の包含関係を示すものではない。また、内部構造としての意味的な階層性なのか、文の文法構造としての階層性なのか。更に、モダリティ内部にまで階層性を認めているが、この階層性は助動詞と終助詞の間の問題なのか、助動詞相互間の問題なのか。尚、井島(2001)も言語主体の「心的過程」において働く側面から主観表現論の立場をとるが、階層性には否定的見解を示している。

(3)終助詞、助動詞ともに主観的という観点で括っていいのか。即ち、過去の「タ」や疑問の「カ」は客観的であるにもかかわらず、包まれる側にはない。また、一モダリティ形式が主観/客観両方の意味機能を担うこともあるではないか。更に、何をもちて主

観的といえるのが曖昧である。益岡はモダリティを主観表現としては捉えない立場にたっている。

(4) 主観的意味を担う要素は文末とは限らず、文中にもある。したがって、右に主観、左に客観という水平線を描くことはできない。

(5) モダリティは主文にだけあるのか、それとも従属節にもあるのか。この点に関しては、従来のモダリティ研究の多くが明確化の努力を怠ってきた問題である。仁田・益岡は実際、従属節においてもモダリティが現れることを認めているにも関わらず、「文＝命題＋モダリティ」という二元論を図式化し、モダリティの存在が文成立の要件であるとする文法観で、従属節は考えていないように見せかけている。

以上つまとところ、根本的に解明すべき「多義性（個々のモダリティ形式が複数の意味機能を担うこと）」でありうるための根拠は、これらの概念では説明不可能なのである。しかしながら、この主観表現論・階層的モダリティ論を学史的に辿ってみると、その基本的視点は時枝以来（①時枝→渡邊→南→益岡、②時枝→金田一→寺村→仁田）の陳述論的主張の中に宿っていた。即ち、時枝は「文末辞が文を成立させる」としたが、これを援用して「話し手の主観が終助詞や助動詞という形で文全体を包み込み、それにより文が成り立つ」と考えたのが、モダリティ論の展開の発端だったのである。時枝的な枠組みにありながら、モダリティ概念をかぶせてしまったために混乱が生じたといえよう。更に、80年代に中右の影響で、modality と呼ばれるようになったが、これは元来「陳述論」のことなのである。英語の modality（とりわけ epistemic modality）が日本語の陳述要素（「カモシレナイ」「ニチガイナイ」）に非常に似ているように感じられたためであろう。即ち、推量や意志などを言語場面における話者の行為の一面として捉えると、終助詞も共通性をもつと一見考えてしまいそうになる。しかしながら、実際の英語でモダリティとは法助動詞の表す意味であり、結果的に英語においても「主観表現のモダリティ論」と「現実外の事態陳述のモダリティ論」の両立場が存在することがうかがえる。そこで次に、この非現実事態のモダリティ論を取りあげることにしよう。

### 2.2.2. 非現実事態陳述モダリティ論

もうひとつのモダリティ研究の立場が、Lyons (1977)、Langacker (1987) や尾上 (2001、「叙法論としてのモダリティ論」と称している) の主張する

「非現実の領域に位置する事態を語るときのみ用いられる専用の述定形式がモダリティ形式で、それによって表現される意味がモダリティである」(尾上 2001: 442) と唱えるものである。つまり、通常助動詞として別個に扱う「ウ、ヨウ」の形式に「推量」「意志」などの意味が内在しているわけではなく、終止法というあり方がそれらの意味をもたらし、この表層上に現れた「推量」「意志」などの意味をモダリティとしてみなすというのである。尾上 (2001: 442) は「モダリティとは、モダリティ形式を用いて話者の事態に対する捉え方をその事態に塗り込めて語るときにその事態の一角に生ずる意味 (grounding predication) である」と記述している。Lyons (1977) が “objective epistemic modality” を認めているように、モダリティは必ずしも主観的の意味のみではないと考えられる。可能性や必然性は主観的というより客観的な非現実世界を表すものである。この捉え方は英語においてのものではなく、尾上(2001)によると、山田(1936)の先行学史から受け継いでおり、古代語の複語尾にあたりとされる。この立場の重要な観点は、①モダリティを話し手の主観が表された部分とはみなさない、②モダリティとテンスは同一レベルであり、重層的・階層的には考えない、の2点である。

ここで注目すべき点は、主観表現論を唱えていたはずの益岡が、2002年には学説をほぼ正反対に転換したことである。それは、「真偽判断のモダリティと価値判断のモダリティとを判断のモダリティという上位カテゴリーで括り、その上位概念である判断のモダリティこそが現実／非現実の対立を基軸とする」というものである。これと同じような見解がジョンソン(1999:145)にみられる。ジョンソンは認識的法助動詞の振る舞いを観察した結果、命題が現実化される可能性には度合いがあり、その可能性が低ければ低いほどモダリティの度合いが高くなる、つまり、「モダリティは命題が現実化される、又は真である可能性の低い、非現実の世界に関わる概念である」という見解を示している。

ここまででいえることは、「推量」や「蓋然性モダリティ」（「カモシレナイ」「ニチガイナイ」）は、まだ起っていないことについて語るという意味では「非現実事態陳述モダリティ」であるが、話し手の主観という意味では「主観表現としてのモダリティ」とも捉えられる。しかしながら、二つの観点に

はいくつかの違いが見られる。「非現実事態陳述のモダリティ観」はモダリティを意味に関わる側面として捉えているのに対し、「主観表現論的モダリティ観」では文法的手段（推量・義務・許可・意志などある種の意味表現の道具）として捉えられている。また、「非現実事態陳述のモダリティ観」は非現実の事態を語る際の一つの現れ方として位置付けているのに対し、「主観表現論的モダリティ観」ではモダリティを文成立の根本的要素として位置付けている。これらの文法観の相違は、従来からの日本語構文をめぐっての捉え方の相違に起因しているように思われる。

### 3. 言語学におけるモダリティの位置付け

#### 3.1 モダリティの定義

モダリティの概念は曖昧なため多様な定義が可能ではあるが、Palmer (1979) や Lyons (1977) は、一応にして「話し手の見解や態度」と定義する。また、論理学でモダリティは可能性や必然性を表し客観的なものと捉えられているが、自然言語におけるモダリティは本質的に主観的であると Palmer (1986) は指摘する。即ち「モダリティは話し手の主観的な態度や見解を文法化したもの」と定義される。

#### 3.2 モダリティ表現の多様性

Lyons (1977) は命令文・疑問文のほかに願望・意志、必然性・義務や確実性・可能性そして文副詞までを広くモダリティとしてカテゴリー化した。Perkins (1983) は、「モーダルな意味を表す表現主体は法助動詞以外にも多様なものがある」とし、Palmer (1986) は「日本語の「カ」「サ」「ヨ」「ネ」もモダリティである」と示唆する。このように個別言語の表すモダリティの意味は非常に多様であることがうかがえる。しかしながら、モダリティを考察する上で最も有効な手段は法助動詞であると筆者は考えている。それゆえに、検討材料をあえて法助動詞に限定して論を進めることにする。

### 4. 法助動詞の意味研究の動向

#### 4.1 英語の法助動詞の意味研究の動向

言語における法性の研究は、特定の法表現、例えば英語の法助動詞を対象に行われてきた。そこで、次に法助動詞の意味的分析における先行研究をあげ、英語の法助動詞の意味的特性を吟味しておきたい。

まず、Hofmann (1979) が普遍的なlogical modal-

ity (possible, impossible, necessary) を横軸に、言語固有の linguistic modality (epistemic, deontic, capacity) を縦軸に取った表を提示し法性の素性分析を行った。そして、様相論理学における法性の基本概念を「可能性 (possibility)」と「必然性 (necessity)」の二つの論理的法概念とし、これを言語的法概念に取り込む。とりわけ、認識論理学で扱われる可能性／必然性を表す言語表現を認識的法性 (epistemic modality, speaker-oriented)、義務論理学で扱われる義務／許可の言語表現を根源的法性 (deontic modality, subject-oriented) と呼ぶ。やがて、「生成意味論」や「解釈意味論」の枠組みに基づく意味と文法の総合的解釈 (Ross 1969 ; Jenkins 1972) の結果、法助動詞は epistemic / root (deontic) modality の二分化体系<sup>4</sup>へと分類され始める。則ち、命題内容の蓋然性に関する話し手の査定を表す epistemic 用法と主語指向的な deontic 用法が認められたわけである。この分類は、1980 年代に入っても採り入れられる。1960 年代末頃～1970 年代初頭にかけて、一見同義であるかのように思われる法助動詞同士の意味の相違や法助動詞対疑似法助動詞の意味の相違がクローズアップされる。Close (1975) が epistemic modality に対し、話し手の確信の度合いを表す階層性 (might < may < could < can < should < ought to < would < will < must) を示した。こうしたアプローチは対照言語学の分野にも採り入れられた。日英語助動詞の主観性／客観性については澤田 (1975) が論じている。

1970 年代末頃～1980 年代になって、まず Palmer (1979) による法助動詞の記述的研究を初めとして、Palmer (1986) では modality に関する理論的な分析がなされる。それは Lyons (1977) が提唱するモダリティ概念をふまえて、epistemic / deontic の二極化をはかったものである。あくまでも modality は “non-factuality” であるとの立場を取る。コーパスに基づく分析を試みた Coates (1983) は不連続のカテゴリーを想定し「漸次的推移性モデル」ならぬ「ファジー集合理論」を適用した。また、Leech (1987) は epistemic / root の二分法を利用した記述の意味論 (Halliday 1970 ; Ota 1972 ; Quirk & Greenbaum & Leech & Svartvik 1985) を展開する。Traugott (1989)、Sweetser (1990) は法助動詞を歴史言語学的に分析した。更に、認知意味論的視点では、Lakoff (1987)、Taylor (1989) の「プロトタイ

ブ意味論」があり、これは二分法では割り切れない段階的言語現象をとらえるのに適した理論である。Langacker (1987) は主観性／客観性のアプローチから、また中右 (1994) は階層意味論モデル [D-MOD [S-MOD [P]]] を提唱した。ここまであげてきた研究を通時的にまとめると、欧米では 1970 年代は法助動詞のみをモダリティとしたが、1980 年代になると主観表現一般 (法動詞や法副詞等) や (語用論的見地からみた) 文の種類までが広くモダリティとしてカテゴリー化されたといえよう。

以上のように枠組みこそ多様化しているものの、英語法助動詞の意味上の特性は一貫して以下のようにまとめられよう。

法性：命題に対する話し手の心的態度

多義性：epistemic modality／deontic modality

遂行性：独自の illocutionary force (根源的用法)、  
各 speech act 成立の条件は話し手と聞き  
手との間の社会的相互作用

更に、Lyons (1977) も分析するように、とりわけ認識的法助動詞には特異性がみられる。これに関しては、黒滝(1996)に「認識的法性の不可侵性」<sup>5</sup>としてまとめられている。因みに、Lyonsは主観的対客観的認識表現の区別、遂行的対非遂行的義務表現の区別を的確に扱い、「発話の論理構造：{遂行部 (法部 [命題部])} = I say so(it is so [proposition])」を提案している。しかしながら、この分析においてはepistemicとdeontic間の意味表示に何の関連性も認められていない為、単一の法表現が二種類の法性を表し得るとする多義性までは的確に説明できない。従来、epistemicとdeonticは異なった意味構造を持つものとして分析されてきたのであるが、Tregidgo (1982) は、これら二用法の間に密接な関係を認めながらも、むしろこれらは単一の基本的意味の文脈による変種とみなす立場を取る。この分析手法を「核意味分析」と呼ぶ。Tregidgoは法助動詞の多義性への有効な説明原理は与えてくれたが、文中での機能は考慮に入れず法助動詞単独の意味分析で終わってしまう。

#### 4.2. 法助動詞に等置される日本語モダリティの意味研究の動向

英語の epistemic modality に相当する、いわゆる真偽判断のモダリティは 90 年代活発に議論され、体系化の試みもなされてきた(益岡 1991；三宅 1995；宮崎 1997；大鹿 1999；仁田 2000；森山

2000)。これに対して、deontic modality に関係する「価値判断のモダリティ(益岡 1991)」、「策動的モード(森山 1992)」の分析はそれ程なされていない。後にそれを行ったのは、「価値判断の事態選択形式群」という名称を用いた森山 (2000)、「複合文末形式」として分類した田村 (2001) の 2 例が管見で指摘できるところである。とりわけ、田村は「意味論的に必然性・可能性を表し、語用論的には主観性表現である」と解する。

益岡(2002)は「現実性モダリティ論」の立場にたち、真偽判断のモダリティは「断定—非断定」、価値判断のモダリティは「現実—非現実」という 2 項対立をなすことを明確化している。価値判断のモダリティについても 2 項対立的な見方に立っている益岡の観点は斬新的であるといえよう。更に、真偽判断のモダリティの「断定」に関し、現実において当該の事態が真であると認定するという意味で、「現実」の領域に属するものであると結論づけた(益岡 2002：13)。したがって、両者とも「現実の世界—思い描かれた非現実の世界」というパラダイムが成立する。

真偽判断のモダリティに関し、三宅(1993)は、「カモシレナイ」の意味は認識的モダリティの体系の中で、「可能性判断」というひとつの下位類を成していて、それは可能性の高低・程度についての認識ではないことを論証した。藤城 (1997) は、「ダロウ」は現実界ではなく、「想像」の中での断定を表すことで「未確認」を示すのに対し、「ニチガイナイ、ハズダ、ニキマッテイル」は命題の成否には直接触れないことで「未確認」を示唆するものという見地から「判断のモダリティ」に関する考察結果を明らかにした。三宅(1993)は、「命題が真だと確信する」という「確信的判断」として「ニチガイナイ、ハズダ」などを位置付ける。概して、ニチガイナイに関しては「蓋然性が高いことを表す (これに対し、カモシレナイは相対的に蓋然性の低いことを示す)」と記述されることが多い(寺村 1984；野田 1984；森山 1989；仁田 1991)。尚、阪田・倉持 (1980) は「ニチガイナイ」を断定としてカテゴリー化した。

ここで、「判断のモダリティ」は「推量」の概念と密接に関わっているので、「推量」の概念の捉え方として位置付けられる二つの異なった立場に言及することにしよう。一つは「想像の中で命題を真であると認識すること」を「推量」とする立場 (大鹿 1992；三宅 1993) で、もう一つは「矛盾する内容

でも成立する可能性があることを暗示する」ことを「推量」の本質と捉える立場(森山 1992)である。

木下(1998)は、真偽判断のモダリティと「既定性」(発話時点において既にどこかで真偽が定まっていること)との関連性を明らかにする。即ち、「ヨウダ、ラシイ」の判断内容には「既定性」が必要だが、「カモシレナイ、ニチガイナイ」にはその制約はなく、むしろ既定的でないという解釈が優先する。杉村(1999)は「事態の蓋然性」と「判断の蓋然性」とが混同されていることを指摘し、前者は客体化された命題で述べられる事態成立の可能性の度合い、後者は話者による推論的判断の確信の度合いと区別されることを統語的観点から明らかにした。黒滝(2001)は、英語の認識的法助動詞(*can, may*)との対照分析から、「カモシレナイ」を位置付け、日本語の認識領域には、①「一つの可能性」か「全ての可能性」かで判断する動的な認識、②現実としてではなく想像の中で思い巡らす静的な認識、の2面性があり、その根底には共有知識か話し手固有の知識かが関わっていることを考察している。対照言語学的立場といえ、その他山田(1990)や原田(1999)の、英語と日本語の必然性・可能性表現を対応させた研究がある。しかしながら、英語の法助動詞の *epistemic/deontic* のカテゴリーを、日本語の「判断のモダリティ」と対等のカテゴリーとして対偶的に対応させることがはたして本当に可能なのか疑問であり、この点に関してはこれからの研究課題となることを指摘しておこう。

## 5. 法助動詞研究における二つの動向

4章で概観したように、これまで一般的に英語の法助動詞の捉え方は、多義的側面からのそれが多く見受けられ、例として法助動詞の多様な意味用法の分類や記述といった側面からの検討が多かったように思われる(Lyons 1977 ; Palmer 1986 ; Leech 1987 ; 中右 1994)。この立場に特徴的なのは *deontic/epistemic* の不連続的なカテゴリーの設定である。これはモダリティ形式の用法を分類するのに有効であるが、結果的に一モダリティ形式の担う複数の意味用法に共通性は認められないとする立場をとるものである。日本語のモダリティ研究でも仁田、益岡や森山が、この不連続のカテゴリーを設定する手法を援用している。しかしながら、「多義性と *core meaning* のアプローチは矛盾しないはずであ

る」という反論から構築された理論が以下に展開されるところである。即ち、個々の法助動詞は語彙的には単一の中核的意味特性を持ち、法助動詞文の解釈はそれらの中核的意味と発話の文脈から得られる情報との相互作用の帰結であるという考え方である。これはまさに、多義性は一切存在しないとする「単一的意味論」の主張である。この単義論的立場ではモダリティ形式のもつ様々な用法と、形式に内在する語彙的意味とが区別して扱われる。その語彙的意味の中心概念は可能性と必然性で、各種の用法の統一的説明を試みる上での基本概念となっている。個々の発話状況の中でいかなる多様な解釈を受けるかという解釈過程を説明していく、この手法をとっている研究者には、Perkins (1983) の *Core Semantics* に端を発し、山田(1990)、Klinge (1993)、中野(1993)、Groefsema (1995)、Papafragou (1998) 等があげられる。認知論的論者の Sweetser (1990) もその一人である。一見すると、法助動詞の分析に単義的アプローチを採用するか、多義的アプローチを採用するかで分かれてきたようであるが、両者を擁護し適切に統合して考察したのが、前述の Coates (1983) であるといえよう。

最近では、この多義性は最初から内在していたものではなく、「主観化 (subjectification)」という意味変化をへて発達したものと捉えようとする気運が高まっている。法助動詞の意味発達傾向は *deontic* から *epistemic* へとなり (Traugott 1986<sup>6</sup> ; Shepherd 1982 ; Nakano 1982 ; Sweetser 1990 ; Bybee and Pagliuca 1985 ; Bybee 1988)、その逆方向はあり得なかったと考えられる理由を以下のようにまとめてみた。つまり、これまでは *deontic* から *epistemic* という法助動詞の意味発達傾向の図式構築が、「一般化」という枠組みに基づいたそれであったことを原因としてあげておきたい。則ち、意味変化をもたらす要因として、最近この分野の研究者が指摘している主要な意味変化の過程には、①一般化②メタファー的拡張③語用論的強化<sup>7</sup>の三種類がある。とりわけ「一般化」とは、一般の語彙項目(*lexical item*)が文法形態素(*grammatical morpheme*)に発達する過程、則ち “*grammaticalization*” (Bybee 1988) においてよくみられる過程である。その過程において、語彙項目が固有で特殊な意味内容は喪失され、より一般的文脈で用い得るため、より一般的、抽象的意味を持つようになるのである。これを法助動詞に適用

すると、本動詞＞主語である動作主の属性・特性＞命題指向の意味へと変化したと考えられる。具体的に、Sweetser (1990) の英語で行われた分析を、日本語で説明すると次のようになる。deontic用法の義務や許容という概念が外的な力による「行為実行への強制的な移動」と「行為実行への移動の妨げとなる障壁の欠如」として捉えられ、更にこれに、推論行為を結論へ向かわせる移動行為としてのメタファーが加わり、「～という結論へ到達せざるを得ない＞～ニチガイナイ」「～という結論へ到達することを妨げられていない＞～カモシレナイ」というepistemic用法が生じる。ここで注意しておくべきことは、認知文法での主観／客観の対立は概念化における視点のあり方に関するものであって、主観表現論での主観／客観とは異なるものである。

更に、澤田 (2001) は、force dynamics や domain の概念を用いて、認識領域のイメージスキーマを想定する。それにより、認識的法助動詞が表す推論のパターンとして、「断定」と「予測」を区別し、epistemic modality の多義性の解明を試みている。藤井 (2000) には、(一般に、日本語の epistemic と deontic とは異なる類型で関連性はないと考えられているが) 実は日本語においても、deontic＞epistemic の意味拡張・多義性と曖昧性がみられることに着目した研究がある。例えば、「義務を表す『～なければならない』は本来『[命題+ない]といけない』という表現である。その『いけない』という述語が、[命題+ない]の部分で表される事態に対する話者の否定的評価を表している。」となる。ここから以下の理論が導き出されることとなった。つまり日本語において、より文法化された deontic モダリティ表現は epistemic 用法への意味拡張が認められるとする考え方である (藤井 2000 : 57)。

また、認知文法において法助動詞の有無は非現実／現実という対立にもとめられるが、その把握の根底にあるものが Langacker (1987) による dynamic evolutionary model という認知モデルである。そこには事態成立に向けて「力」(force dynamics)が働いており、その「力」が抽象化していった認識の客体としての性質を失い主観化されるというようなグラウンディング形式こそがモダリティであるとされる。グラウンディング形式と解釈すると、テンスもモダリティの一種として捉える事ができ、終助詞や主観的な意味のものはモダリティでないということにな

る。これは日本語学の尾上の主張と相通ずるものである。

ここで概観した要因分析は実際に起こった意味的言語現象を辿っているに過ぎず、理論的、記述的解釈の域を出ていない。即ち、「意味概念」が法助動詞の中にいわば「符号化」されているとの立場をとっているにすぎないのである。最近になって、法助動詞の意味は極めて「意味確定度不十分」なものであり、完全な意味は聞き手の推論によって構築されるとする「関連性理論」が取り上げられた。この関連性理論の枠組みで法助動詞を分析したのが、Papafragou (1998) である。ところが、命題領域が五つに具体化されてはいるものの、これらは重複しているのではないかとの見方もある。

## 6. 日本語研究における「認識的モダリティ」論の問題点

従来の日本語のモダリティ研究は、話者の心的態度という意味論的な概念が、統語的には命題を包み込むという階層的構造観と結びついて進展してきたところに特異性があったといつてよい。

前述したように、益岡 (1991) はモダリティを「主観性」<sup>8</sup>一般を表すものという前提にたつて論じている。このモダリティ論は、文の意味構造を主観／客観の二項対立的に捉える考え方に基づくものである。しかしながら、このように話者の主観性全てをモダリティとしてカテゴリー化すると、真偽判断から話者の感情と呼べるもの、更には対人的配慮に到るまで、広範囲にわたる多様な要素をも認めざるを得なくなる。したがって、モダリティ＝話者の主観と自動的に同一視するのは安易な考え方といえるのではないだろうか。又、「客観的」とされる「命題」とはどのような言語形式によって構成される部分なのかが問われよう。「命題」を客観的に把握できる事柄と規定することは適切ではなく、この部分にも話者による主観的な捉え方を反映しているものがあるといえないだろうか。

英語学の世界では、中右 (1994) もモダリティを「発話時点における話し手の心的態度」と定義し、その構成要素概念には心的態度＞話し手＞発話時点という順で重要度に差があることを指摘する。則ち、モダリティらしさに段階性を認め広く適用させている。しかし、Lyons (1977) は“objective epistemic modality”をも認めている。つまりところ、「こと



ばに表される主体の関わる」要素は必ずしもモダリティとは限らないといえよう。更に、Lyons はテンスとモダリティを共に認識領域に関わるものとして統一的に扱っている。重層的、階層的ではなく、同一レベルとして捉えているのである。例えば、とりわけ英語において「過去形」は必ずしも過去の意味概念をもつとは限らず、「現在形」も必ずしも現在時を表すとは限らない。いわば、認識領域内に遠／近（現実／非現実）的視点があるともいえる。また、モダリティ形式が話者の主観を表す文法的表現手段であるとの見解は、いわば一頃前の印欧語における「個々のモダリティはそれ自体内在的性質として固有で単一の主観的意味を担っていて、それが意味拡張を起こして多義性をもたらした」というモダリティ分析による通時的解明に過ぎない。認知文法では、その多義性を生ぜしめる要因として事態の実現をもたらす「力（ちから）」の所在が想定されてきたが、この「力」の主観化というプロセスが認められないと説明不可能である。そこで、とりわけ法助動詞においては、本動詞が表す事態を非現実の事態として述べるものと捉え、法助動詞の有無は非現実／現実の対立に対応するとの見方が現れた。したがって、「抽象的な意味での「力」の関与」というアプローチと「非現実の事態を語る手段」というアプローチは別個のものであるが、たまたま英語には繋がりがみられるのである。同様に日本語のモダリティにおいても英語で指摘した図式が適用されるのである。即ち、日本語において最もすっきりした解釈を可能にするためには、「非現実の事態を語る文法形式」を採用することが有効であると考えられる。これによると、モダリティもテンスも同一次元でみることができる。「非現実の事態を語る手段」とは、まだ起こっていないこと、あるいは実際に起こったことであるが話者は直接経験していないこと、あるいは全く架空の事態について語るための文法形式である。経験に基づいた判断や推量、根拠のある可能性など、客観的に捉えられることが多い。モダリティには、事態そのものを描写するのではなく、表現主体の眼鏡を通して非現実の事態を描く機能がある。この見解からすると、日本語の終助詞など、直接話者の感情を表現するものはモダリティの範疇にい入れられないことになる。更に、話者が非現実の事態について語る際、過去から現在に至るまでの様々な経験や知識の積み重ねに支えられている。その積

み重ねが目に見えないフィルターとなり、話者はそのフィルターを通して非現実の事態と対峙しつつ判断したり、可能性を見抜いたり推し量ったりすることができるのである。（実際、筆者が収集した日本人英語学習者のモダリティ習得のデータにも、表現主体の内面にある感情ではなく、外的環境にある根拠に対する捉え方が反映されている。）

以上、日本語研究において認識的モダリティの概念や役割の理解を困難にしている要因として次の4点があげられる。

- ①日本語のモダリティには、英語の法助動詞の歴史、機能や意味と同一の文法形式とは言い難い部分がある。
- ②日本語の文構造の捉え方には様々な立場がある。
- ③統語論・機能論・意味論などでモダリティの捉え方が多様化している。
- ④個別言語的研究と対照言語的研究などアプローチにより捉え方の相違がみられる。

どの主張も、「おそらくは」や「暫定的には」などの但し書きのもとになされているところをみると、まだまだ模索中の研究過程にあるといえそうである。そこで、これらの現状をふまえ、言語習得的アプローチからモダリティをめぐる諸問題を見直してみたいという意図から試みられたのが黒滝(2002)の研究である。次に、数少ないモダリティの習得研究を回顧してみよう。

## 7. 認識的モダリティの習得研究

第二言語としての日本語の習得状況の観点からモダリティを研究したものは皆無に等しく、筆者の知る限りにおいては大島(1993)だけである。（但し、文末表現を取り扱った研究には、Sawyer 1992、佐々木・川口 1994、峯 1995、初鹿野 1995、尾崎 1996 がある。）大島(1993)は「ダロウ」「カモシレナイ」「ヨウダ」「ミタイダ」の習得状況を母語別・学習段階別に分析した結果、韓国語話者に関しては、中国語話者よりも日本人の選択結果との相関が強く現れ、しかも学習段階が進むにつれ日本人の選択結果に近づくことを考察している。

次に、epistemic modality の L1 習得に関する日本語以外の研究の一部を概観しよう。

Wells(1979)は、「幼児の英語のモダリティ習得は deontic modality > epistemic modality となる。

但し、might (見込み likelyhood) > may (習得時には許可)となる。これは子供と interaction をはかる大人の話し言葉に多いためではないか。」という考察結果を示している。Choi(1988)によれば、子供は否定の deontic modality を epistemic の意味の“I don’t know”よりも先に習得するという。Akatsuka & Clancy (1993) は「日本語・韓国語母語話者の場合、epistemic modality が discourse interactional protocol の中に埋め込まれていたら意外と習得は早い。」と示唆する。

更に、Stephany (1995) は「L1 習得では deontic modality > epistemic modality となるが、L2 習得の場合、両者は最初から同時に現れる。そして、成人は epistemic modality から、幼児は deontic modality から習得する。deontic 用法の desire を表す“I want to”は英語を母語とする子供の間接的依頼表現として早く発達する。また ability, permission を表す can/can’t も早く発達する。possibility, probability の epistemic modality は3歳～5歳と遅い。」と指摘する。また、Choi (1995) は韓国語母語話者の子供のL1 習得に関して調べ、「epistemic modality は早い時期に現れ、その習得は informal interactive contexts で促進される。formal speech や written reports では習得しづらい。そこには話し手の既知情報と新情報の同化度が関わっている。」と考察している。Ahrenholz (2000) は、伊語母語話者の場合、modality domain の中にトピックとなる情報をおきつつ、暗示的、かつ文脈依存的に modality の概念を表すのに対し、独語を母語とする伊語学習者は3段階(formulaic>explicit>implicit)で指示機能を移動させながら発達させていくことに言及する。Lee & Law (2001) は広東語を母語とする2～3歳の子供の縦断研究を行い、epistemic modality の発達過程を調べた。そして、5つの接尾辞の variation があり、もう既に evidentiality の概念は認知していることを検証する。

以下、epistemic modality のL2 習得に関する欧米の研究の一部に触れることにしよう。

Dittmar & Terborg (1991 : 371) は「deontic modality は明示的に、epistemic modality は暗示的に発達される。また、前者は教示的だが、後者は自然な談話で現れやすい。」と説明している。そして、Ramat (1992 : 316) は「独語学習者において、I think/know と deontic 用法の法副詞とは、否定形

(I don’t know)で先に現れる。」とし、これに対し Input frequency との関係を示唆する。また、deontic modality と epistemic modality を別個の表現形態としてもつ母語話者とは異なり、英語母語話者の場合、意味拡張によって epistemic modality を容易く習得できることも指摘する。Schumacher & Skiba (1992 : 396) がポーランド語を母語とする独語学習者による中間言語を分析したところ、epistemic 用法の中心概念は必然性ではなく可能性であるので、can>must の順に現れることがわかった。

更に、Dittmar & Ahrenholz (1995) による伊語を母語とする独語学習者の研究では、法助動詞は法副詞や法形容詞よりも早く習得され、とりわけ deontic modality > epistemic modality という習得順序が得られた。Bernini (1995 : 297) は「母語が独語と英語の伊語学習者は、意味拡張として捉えるため、epistemic modality の習得は早いと予想されていたが、実はそれ程すんではない。これは学習者が母語の意味的特性を転移させていないためではないか？」と問題提起している。

以上、概して「西欧語母語話者のL1 習得は deontic modality > epistemic modality となる。そしてL2 習得の場合、両者は最初から同時に現れるか、あるいは deontic modality > epistemic modality の順に習得される。一方、日本語・韓国語母語話者においては、L1・L2共に epistemic modality の習得が意外と早い。」という一般的研究輪郭が描かれているようである。とりわけ、後者の日本語・韓国語母語話者に関わる諸問題の原因究明に関しては、今後の研究課題としたい。

それではこれを個別研究の遂行に反映させるためには、はたしてどのような方法論があるか。たとえば、英語を母語とする子供の第一言語の習得では、deontic modality が先に現れて当然である。それは、認知的に未成熟であり、社会的にも親に依存しているからである。しかしながら、成人の第二言語習得となると、認知する中心概念が epistemic であるため、自然言語のみならず学習言語でも epistemic modality の方が先に現れると考えられる。そこで、黒滝 (2002) では、学習言語としての epistemic modality の習得がどのような言語環境で促進されるかをみるために、realis/irrealis の枠組みを取り入れ分析した結果、日本人英語学習者の場合、「文法化」の順序とは逆に、epistemic 用法が先に現れる

ことが考察された。因みに、この文献の SLA データは epistemic modality の文法化の初期段階をみるのに有効的であったことを示唆しておこう。

## 8. おわりに ー現状総括と緊急的将来課題ー

以上、従来の「発話時点における話し手の心的態度」という枠組みでは、モダリティ（とりわけ法助動詞）の意味概念は把握しきれないことを概観してきた。そこで、今後の筆者の研究の方向性としては、日本語固有の「主観表現論としてのモダリティ」論と違った方向を目指し、更には英語におけるような多義的解釈からも逸脱した独自の中間言語モダリティ論を展開することにある。はたして、中間言語においてモダリティの概念はどのように捉えられているのであろうか。この点に関して妥当的な説明原理を唱える場合、日英語のみを検討しただけで捉えきることにはなだ困難であるといつてよいだろう。Bybee & Pagliuca (1985)、Pagliuca (1994) や Perkins (1983) のように、typological and cross-linguistic approach が必要であることはいまでもない。

そして、従来の意味変化の過程では常に deontic modality の意味を経てきた点が問題であった。実は、epistemic modalityこそ意味相互の関連性を解くカギを握っているといえるのではないだろうか。L1 習得に関する先行研究では、韓国語母語話者に限って、欧米の諸言語を母語とするものとは異なり、epistemic 用法の習得が早いという指摘がある (Choi 1995)。興味深いことに、韓国語と似た文法体系をもつ日本語を母語とする学習者の場合にも同様の言語現象がみられた。則ち、日本人英語学習者の法助動詞の習得順序は、意味拡張（共時的観点）や文法化（通時的観点）の方向性とは逆に、epistemic > deontic の傾向にあることがわかった（黒滝 2002）。ここで、法助動詞の認識的用法の発達要因を grammaticalization と指摘するのは時期尚早であると考えられる。むしろ、韓国語母語話者と日本語母語話者の認知メカニズムは epistemic の概念が中心に働いていて、deontic から input されても共時的に意味拡張して捉えることができず、極論的意義付けを敢えてさせてもらえれば、両者を別個のものとする指向性があるからであると考え余地もあるのかもしれない。

以上のように、習得過程をみていくことにより、

母語の文法的固有性がより一層明確化される点こそが、言語習得という研究アプローチの意義であろう。但し、文法化に方向性や一般性がよく指摘されるが、文法化の過程により捉え方が違うので、年齢別・地域別により違いが起こりえても不思議ではない。例えば、英語を母語とする幼児の日本語学習者の場合、「～したら…かもしれないよ」よりも「…はダメ。～だから。」が先行するデータを得ている。なおこのデータ研究は現在別稿を予定しており、鋭意執筆中である。ここでの結果はある意味で deontic > epistemic の習得順序傾向を裏付けているということになるだろう。

これまで法助動詞一形式に複数の意味を対応させてきたが、この意味間には通時的な文法化は成立しているものの、それを共時的な「多義性」と位置付けていいものであろうか。これに対し統一的説明原理を与えるためには、implicit に発達するとされる epistemic modality を今後どのように観察したらいいのであろうか。また、あくまでも日本語と英語の2言語のみの対照によるアプローチに限界があるという点では、普遍的かつ明確なモダリティ理論をどこまで構築でき、それをどのように日本語教育に位置づけられるかが問題である。更には、情報の捉え方や談話展開の規範は正誤の基準で判断できるものではないので、効果的かつ適切な統計処理法を検討しつつ、研究結果の一般化をはかることも今後の課題となろう。

以上のようにモダリティを位置付けるとしたならば、この複雑なモダリティ理論を、一体いかなる方法論で日本語教育の現場に反映させていくべきなのであろうか。その問題を最後に考えておきたい。やはり、日本語のモダリティ体系の特異性が認められる部分と、普遍的な部分とを明確にしつつ教えていく方がより実用的かつ効率的であろう。まず、モダリティの基本概念（可能性と必然性）や epistemic/deontic の2分化を示し、そこから多様なモダリティの構成内容を捉えさせ、その上で文脈から必要とされる表現を身に付けさせていくのが有効的なアプローチであると考えられる。縷縷述べてきたことから看取されるごとく、かくもモダリティ理論の体系が複雑であることを考慮に入れなければならない。現下の状況は、まさに第2言語としてのモダリティ習得のプロセスを解明しつつ、その成果を日本語教育の現場にフィードバックすべき緊急性

が日々上昇しているといっても過言ではないだろう。こういった現況を前提とし、より効率的な指導法を開拓することが、今まさに焦眉の急を告げているといわねばならない。

#### 謝辞

本稿の執筆にあたっては、桜美林大学大学院佐々木倫子先生とコーネル大学の白井恭弘先生から貴重な御指導を賜りました。この場をお借りして、深甚なる感謝の意を申し上げたいと思います。

#### 注

1. 「法助動詞は本動詞である」(中右 1994) という説もある。
2. 用語は一部異なる。即ち、仁田は「命題」を「言表事態」とし、中右は「みとめ方」を「極性」と称している。
3. 益岡は「包む側と包み込まれる側の存在はあくまでも文構造の問題で、両者の意味の差を必ずしも主観性の大小に起因するとはしない立場」をとる。
4. この 2 用法は、epistemic / root (Hofmann 1979), modality / modulation (Halliday 1970), epistemic / cognitive (Ota 1972), secondary / primary (Close 1975) などの用語で区別される。
5. 「認識的法性の不可侵性 (can は除く)」  
(a) 疑問文中での生起不可。(b) 否定は主陳述に作用する。(c) 条件や時の副詞節中での生起不可。(仮定の意味は主陳述に作用する。)(d) 過去時標識は主陳述に作用する。
6. Traugott (1986) の subjectification という語の意味変化には以下の三傾向がある。即ち、①外面的状況 > 内面的状況を表す意味へ、②談話形成的 / メタ言語的状況を表す意味へ (遂行性、speech act)、③話者の主観的信念 / 判断 / 態度を表す方向、という三傾向である。
7. [メタファー的拡張]  
Sweetser の多義性の解釈によると以下のようである。  
(a) 社会・物理的領域 → epistemic modality  
(b) 認識的領域  
(c) 発話行為的領域  
(但し、この枠組みでは「認識的法性の主観化」までは説明不可能である。)  
法助動詞の意味発達: {命題指向的動的法性 > 客観的認識的法性 (メタファー的拡張の作用域はここまで) > 主観的認識的法性}  
[語用論的強化] 会話的含意の言語習慣化、Traugott  
例) may ; 「できる」の会話的含意は「可能性」
8. 尾上 (1998) は、国語学における伝統的な「主観性」の概念とは、「発話の対聞き手的 (現場的) 行為としての側面」のことであり、この意味で「主観性」を典型的に担うのは終助詞であると批判している。

#### 参考文献

- 井島正博(2001)「心的過程としてのモダリティ」文法学会連続公開講義ハンドアウト
- 大鹿薫久(1993)「推量と『かもしれない』『にちがいない』—叙法の体系化をめざして—」『ことばとことのは』10, 96-104.
- 大鹿薫久(1999)「叙法小考」『日本文芸研究』50. 4, 関西学院大学 35-45.
- 大島弥生(1993)「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81, 93-103.
- 奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 尾崎明人 (1996)「追跡調査にみられる終助詞「ね」の使用状況と変化」『日本語研修コース修了生 追跡調査報告書 2』文部省科学研究費基盤研究(B) (課題番号 07458049) 名古屋大学留学生センター
- 尾上圭介(1998)「文の構造と“主観的”意味」『日本語の文に見られる主観性』(第 7 回 C L C 言語学集中講義における講義及びハンドアウト) C L C 日本語学院 ことばと文化センター主催
- 尾上圭介(2001)『文法と意味 I』くろしお出版
- 尾上圭介・坪井栄治郎(1997)「国語学と認知言語学の対話 II」『月刊言語』26.13, 70-83.
- 木下りか(1998)「「真偽判断」を表わす文末形式と「既定性」」『ことばの科学』11, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 171-182.
- 北原保雄(1991)「表現主体の主観と動作主の主観」『国語学』165, 15-25.
- 金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 黒滝真理子(1996)「認識的法助動詞の制約と作用域に関する一考察」『高千穂論叢』30.4, 13-31.
- 黒滝真理子(2001)「認識領域の 2 面性—カモシレナイ再考」『LEORNIAN』4, 37-41.
- 黒滝真理子(2002)「中間言語としての Epistemic Modality に関する一考察—文法化の方向性と習得順序との関わりから—」『英語表現研究』19, 日本英語表現学会, 37-45.
- 阪田雪子・倉持保男 (1980)『文法 II 助動詞を中心にして』国際交流基金
- 佐々木泰子・川口良(1994)「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84, 1-13.
- 澤田治美(1975)「日英語主観的助動詞の構文論的考察」『言語研究』68, 75-103.
- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 澤田治美(2001)「推論のパターンと法助動詞の意味解釈 (下) —認識的な must と should をめぐって—」『英語青年』147. 4, 225-229.
- ジョンソン由紀(1999)「モダリティ理論の明確化を求めて」『言語学と日本語教育』くろしお出版 145-160.

- 杉村泰(1999)「事態の蓋然性と判断の蓋然性」『ことばの科学』12, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 171-187.
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 田野村忠温(2001)「現代語のモダリティ私論」文法学会研究会連続公開講義ハンドアウト
- 田村直子(2001)「複合文末形式の意味と用法—ナケレバナライやテハイケナイを例に—」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェース 上巻』くろしお出版 423-433.
- 寺村秀夫(1981)「ムードの形式と意味(3)—取立て助詞について—」『文芸言語研究』6, 筑波大学文芸・言語学系 53—67.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語論』岩波書店
- 中右実(1979)「モダリティと命題」林栄一教授還暦記念論文集編集委員会編『英語と日本語と』くろしお出版 223-250.
- 中右実(1994)『認識意味論の原理』大修館書店
- 中野弘三(1993)『英語法助動詞の意味論』英潮社
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(1999)「モダリティを求めて」『月刊言語』28-6, 34-44.
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎, 仁田義雄, 工藤浩編『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店 79-159.
- 野田尚史 (1984)「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」『日本語学』3-10, 111-119.
- 野村剛史 (1991)「助動詞とは何か—その批判的再検討—」『国語学』165, 38-52.
- 初鹿野阿れ (1994)「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—『ね』を中心として—」『言語文化と日本語教育』8, 14-25.
- 芳賀綏 (1954)「「陳述」とは何もの?」『国語国文』23, 4 京都大学国文学会 241-255.
- 原田登美(1999)「モダリティ論小考—モダリティをめぐる日本語研究の二つの動向—」『言語と文化』3, 甲南大学国際言語文化センター 123—136.
- 藤井聖子(2000)「認識的モダリティと“その周辺”との関連—文法化・多義性分析の観点から—」『認識のモダリティとその周辺—日本語・英語・中国語の場合—』第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 凡人社 52-71.
- 藤城浩子(1997)「「判断のモダリティ」についての一考察」『日本語教育』92, 153-164.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版
- 益岡隆志(1999)「命題との境界を求めて」『月刊言語』28-6, 46-52.
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志(2002)「判断のモダリティ—現実と非現実の対立—」『日本語学』21, 6-16.
- 三上章(1959)『続・現代語法序説—主語廃止論』刀江書院
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 峯布由紀(1995)「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」『日本語教育』86, 65-80.
- 三宅知宏 (1992)「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢 日本学篇』26, 大阪大学 35-47.
- 三宅知宏 (1993)「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61, 大阪大学国語国文学会 36-46.
- 三宅知宏(1995)「『推量』について」『国語学』186, 86-76.
- 宮崎和人(2000)「ムードとモダリティ」『日本語学』19.5, 50-61.
- 森山卓郎 (1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版 57-120.
- 森山卓郎(1992)「日本語における推量をめぐって」『言語研究』101, 64-83.
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎, 仁田義雄, 工藤浩編『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店 3-77.
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山田小枝 (1990)『モダリティ』同学社
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館
- 渡邊実(1953)「叙述と陳述—述語文節の構造」『国語学』13-14, 国語学会 20-34.
- 渡邊実(1971)『国語構文論』塙書房
- Ahrenholz, B. (2000) Modality and referential movement in instructional discourse—Comparing the production of Italian learners of German with native German and native Italian production—, *Studies in Second Language Acquisition*, 22-3, 337-368.
- Akatsuka, N. (1985) Conditionals and epistemic scale, *Language*, 61, 625-639.
- Akatsuka, N. & P. Clancy (1993) Affect and conditionals: Evidence from Japanese and Korean acquisition., *Japanese/Korean Linguistics*, 2-1, Palo Alto: CSLI, 76-192.
- Austin, J. L. (1962) *How to do things with words*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bernini, G. (1995) Lexical expression of modality in second languages: The case of Italian modal verbs, In J. Bybee & S. Fleischman (Eds.), *Modality in grammar and discourse*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 295-318.
- Binnick, R. I. (1972) Will and be going to II, Papers from the 8<sup>th</sup> Regional Meeting, Chicago Linguistic Society, 3-9.
- Bybee, J. L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*, Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J. L. (1988) Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning, *Berkeley Linguistic Society*, 14, 247-264.
- Bybee, J. L. & W. Pagliuca (1985) Cross-linguistic comparison

- and the development of grammatical meaning, In J.Fisiak (Ed.) *Historical semantics and historical word-formation*, Berlin: Mouton., 60-83.
- Choi, S. (1988) The semantic development of negation : A cross-linguistic longitudinal study, *Journal of Child Language* , 15 , 517-531.
- Choi, S. (1995) The development of epistemic sentence-ending modal forms and functions in Korean children, In J. Bybee & S.Fleischman (Eds.), *Modality in grammar and discourse* , Amsterdam/Philadelphia :John Benjamins., 165-204.
- Close, R.A. (1975) A reference grammar for students of English. London: Longman.
- Coates, J. (1983) The semantics of the modal auxiliaries., London & Canberra: Croom Helm.
- Dittmar, N. & Terborg, H. (1991) Modality and second language learning: A challenge for linguistic theory, In T. Huebner & Ch. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*, Amsterdam/ Philadelphia : John Benjamins., 347-384.
- Dittmar, N. & B. Ahrenholz (1995) The acquisition of modal expressions and related grammatical means by an Italian learner of German in the course of 3 years of longitudinal observation, In A.G.Ramat & G.C.Galeas (Eds.), *From pragmatics to syntax: Modality in second language acquisition* , Tübingen: Gunter Narr Verlag, 197-232.
- Groefsema, M. (1995) Can, may, must and should: A relevance theoretic account., *Journal of Linguistics* 31, 53-79.
- Halliday, M.A.K. (1970) Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English, *Foundations of Language*, 6., 322-361.
- Hofmann, T. R. (1979) On modality in English and other languages, *Papers in Linguistics*, 12: 1-2, 1-37.
- Kiefer, F. (1994) Modality, In R.E.Asher & J.M.Y.Simpson (Eds.) *The encyclopedia of language and linguistics*, Oxford/ Tokyo: Pergamon Press, 2515-2520.
- Klinge, A. (1993) The English modal auxiliaries: From lexical semantics to utterance interpretation , *Journal of Linguistics* , 29, 315-357.
- Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things*, Chicago: Chicago University Press.
- Lakoff, R. (1972) The pragmatics of modality, *Chicago Linguistic Society*, 8, 229-246.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of cognitive grammar 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Lee, T.H.-T. & A. Law (2001) Epistemic modality and the acquisition of Cantonese final particles, *Issues in East Asian language acquisition*, Tokyo: Kuroshio . 67-128.
- Leech, G.N. (1987) *Meaning and the English verb* 2<sup>nd</sup>, London: Longman.
- Levinson, S.C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Nakano, H. (1982) An approach to the semantic development of *can* and *may*, In H. Nakano & K. Kondo & H. Iida (Eds.), *Studies in linguistic change: in honour of K. Araki*, Tokyo: Kenkyusha., 271-303.
- Ota, A. (1972) Modals and some semi-auxiliaries in English, *The ELEC Publications*, 9, 42-68.
- Palmer, F.R. (1979) *Modality and the English modals*, London & New York: Longman.
- Palmer, F.R. (1986) *Mood and modality* , Cambridge : Cambridge University Press.
- Palmer, F.R. (1990) *Modality and the English modals* 2<sup>nd</sup>, London: Longman.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and modality* 2<sup>nd</sup>, Cambridge : Cambridge University Press.
- Pagliuca, W. (Ed.) (1994) *Perspectives on grammaticalization*, Amsterdam : Benjamins.
- Papafragou, A. (1998) Inference and word meaning: the case of modal auxiliaries, *Lingua*, 105, 1-47.
- Papafragou, A. (2000) *Modality, issues in the semantics-pragmatics interface*, Amsterdam: Elsevier.
- Perkins, M.R. (1983) *Modal expressions in English*, London: Frances Pinter.
- Quirk, R. & Greenbaum, S. & Leech, G. & Svartvik, J. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*, London/New York : Longman.
- Ramat, A.G. (1992) Grammaticalization processes in the area of temporal and modal relations, *Studies in Second Language Acquisition* , 14-3/4 , 297-322.
- Riviere, C. (1981) Is should a weaker must? *Journal of Linguistics* 17, 179-195.
- Ross, J.R. (1969) Auxiliaries as main verbs, *Studies in Philosophical Linguistics Series One*, Evanston III: Great Expectations. 77-102.
- Sawyer, M. (1992) The development of pragmatics in Japanese as a second language: The sentence-final particle NE, In Gariele Kasper (Ed.), *Pragmatics of Japanese as native and target language*, Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa, 85-125.
- Schumacher, M. & Skiba, R. (1992) Prädikative und modale Ausdrucksmittel in den Lernervarietäten einer polnischen migrantin: Eine longitudinalstudie I , *Linguistische Berichte* , 141, 371-400.
- Searle, J. R. (1979) *Expression and meaning*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Sperber, D and D. Wilson (1995) *Relevance: communication and cognition*, Oxford: Blackwell.
- Stephany, U. (1995) Function and form of modality in first and second language acquisition , In A.G.Ramat & G.C.Galeas (Eds.), *From pragmatics to syntax: Modality in second*

- language acquisition* , Tübingen: Gunter Narr Verlag, 105-120.
- Sweetser, E. E. (1982) Root and epistemic modals: causality in two worlds, *Berkeley Linguistic Society*, 8, 484-507.
- Sweetser, E. E. (1990) *From etymology to pragmatics*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1988) Force dynamics in language and cognition, *Cognitive Science* , 12, 49-100.
- Taylor, J.R.(1989) *Linguistic categorization*, Oxford: Clarendon Press.
- Traugott, E.C. (1986) From polysemy to internal semantic reconstruction, *Berkeley Linguistic Society*, 12, 539-550.
- Traugott, E.C. (1989) On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change , *Language* , 65 , 31-55.
- Tregidgo, P. S.(1982) Must and may: Demand and permission, *Lingua*, 56, 75-92.
- Ueno, T. (1971) A study of Japanese modality: A performative analysis of sentence particles , University of Michigan, Ph.D. thesis.
- Wells, G. (1979) Learning and using the auxiliary verb in English., In V.Lee (Ed.), *Language Development*, New York: John, Wiley and Sons.

くろたき まりこ／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座  
makuro@law.nihon-u.ac.jp

## Contrastive research on the epistemic modality between English and Japanese

KUROTAKI Mariko

### Abstract

Recent research on the Japanese modality has been conducted with various modal concepts in English grammar introduced into the analysis of Japanese. And some Japanese linguists apply Japanese sentence-final particles to the traditional concept in the English modality, that is concerned with ‘the speaker’s opinion and attitude towards the situation he or she is talking about’. But this concept quoted here is exclusively essential to understanding of the uses of English modal auxiliaries, and consequently it cannot be applied to expound all the aspects of Japanese modality.

Here in this paper I will first survey two approaches, namely the subjective or hierarchic modality, and the modality as irrealis domain. Secondly, I will explain two theoretical issues on the English modality; the first of which is that modal auxiliaries do not always involve polysemy synchronically, and the second of which is whether or not there is a parallelism between acquisitional paths and diachronical changes. In order to prove the validity of my explanation about the above points, I will review the previous studies both on the English modality and on the interlanguage modality in second language acquisition.

Finally, I will explore interlanguage modal categories and novel orientation to the modal acquisition.

【Keywords】 subjective modality, hierarchic modality, irrealis domain, polysemy, grammaticalization

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate school, Ochanomizu University)